
私の幸福をあなたに

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の幸福をあなたに

【Nコード】

N6379Y

【作者名】

usa

【あらすじ】

工藤新一 工藤蘭 共に二十歳

嬉しい知らせと共に、二人の間に事件が起きる。

『だって彼女、ウザいし？キャハッ』

一人の少女が蘭を追いつめていく。

新蘭。結婚している設定です。

Happy 1

ここはとある洋風の屋敷。

一組の若い男女が、何やら話しあっていた。

「そんで、ホームズはな…」

「あーはいはい。そうですか」

瞳をキラキラとさせる青年と反対に、彼女はうんざり顔。

「もつと話しておくべきことあるでしょ」

「ん？あ、ああ…」

彼女が強い口調で言うと、彼の歯切れが悪くなる。

「でも、さすがに早いだろ…」

「だーめ！後回しにしたら、新一絶対はぐらかしちゃうから」

新一は苦り切った表情でコーヒーを飲む。

「そんな不味そうな顔したら捨てるわよ」

「じよ、冗談だつて」

カップを取り上げようとする蘭の手を、新一は慌てて止める。

「お前は、いいから座ってるよ」

「…わかりました」

蘭はそう言って、ソファに腰を下ろす。

「にしても、アイツら遅すぎだろ…」

新一は時計を見つめた。

時刻は約束の時間を一五分過ぎ、一時四五分。

「しょうがないよ。来てっていきなり言った、私達が悪いのよ」

「そうそう」

「やっぱそうなのか…」

ん？

今、一人会話に紛れ込んでいなかったか？

「…黒羽。テメエ…」

「いーだろ、別に。鍵かけてなかったそっちがわりーんだからよ」

黒羽快斗は反省した様子もなく、ソファにひっくり返る。

「やめてよ、快斗！ここ、工藤君ちだよ」

青子は快斗を窘めつつ、自分もちゃっかり腰掛けている。

「不法侵入だぞ、全員」

「んな堅いこというなや、工藤。こっちは来てやったんやぞ」

服部平次は新一と肩を組み、黒い顔とは対照的な白い歯を見せる。

「せやけど、あたしらなんも言わんと、急に入ってしもたし…ごめん、蘭ちゃん」

和葉は申し訳なさそうに蘭に謝る。

「私達はいいのよ。無理言ってきたもらったんだし。今、お茶持ってくるから…」

「あ、オレが行くから、座ってるって!」

立ち上がりかけた蘭を再び座らせ、新一はキッチンへ向かう。

「なんやの、工藤君。今日はえらい優しいやん」

「そ、そう?」

和葉が不思議そうに言うと、蘭は曖昧に返す。

「こりゃ、何かあったな」

「何かって?」

ボソツとつぶやく快斗に青子はたずねたが、快斗は答えない。

「そこで、工藤。何でオレらのこと呼んだんや?」

「ん?ああ…」

新一は全員の前に飲み物を出すと、ひとつ咳払いをした。

「え、えーと、オレ達はもう二十歳で、皆それぞれ結婚した…だろ?そんで…まあ、その…」

どんどん歯切れが悪くなっていく新一。

蘭が急かすように小突いた。

もう一度咳払いをし、新一は言った。

「まあ…つまり、オレらにだな…」

再び言葉に詰まる。

すると、業を煮やした和葉が言った。

「苛々さんといって。男なら男らしく、はっきり言ったらどうなん？」

隣で青子が頷く。

「あ、あー…えーと…つまりそういうことだよ。ほら…」

「そんなんでわかるかい！」

「オレらは超能力者じゃねえぞ」

平次と快斗が突っ込みをいれる。

「いや…別に…その…」

「もういいわよ！私が言うから」

蘭がそう言つと、新一はようやく決心がついたようだ。

「ちょっとお前らに報告があつてよ」

蘭の肩を掴んで落ち着かせると、ゆっくりと言った。

「オレと蘭に…」

子供ができた」

本日も、工藤邸は賑やかです。

Happy 1 (後書き)

こんにちは、usaです♪

新連載です！

駄文で時々意味不明ですが、どうぞよろしくお願いします。> ()
|) <

Happy 2

新一からの衝撃の告白から数分。

ようやく客人四人は静かになりかけていた。

「ま、まあ、おかしくはあらへんもんね」
「うん。蘭ちゃん、おめでとう」

和葉と青子は真っ先に祝福の言葉を述べる。

しかし、平次と快斗は新一をからかう方で忙しいらしい。

二人はそろって新一を小突いていた。

「もう！子供なんだから」
「ほつとこ。それより蘭ちゃん、お腹触ってもええ？」
「青子も！」

二人は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ早いよ。一ヶ月だもん」
「でもええなあ蘭ちゃん。もうお母さんになってまうんやね……」

和葉がしんみりと言った。

「お母さんか……うらやましいな」
と、青子も言った。

「二人だってもうすぐだよ、きつと」

「そうかな…」

「うん」

そこで、チャイムの音がした。

「ちょっと出てくるな」

新一が玄関の方へ向かう。

その背中はいくらか誇らしげだった。

「工藤のヤツ、赤ん坊できたら性格変わりのつたな」

平次がぼそりと快斗に耳打ちした。

「そんなもんなのかねえ」

しかし、二人のだらけた会話もそれまでだった。

「ほら、さっさと運んで！」

「早くしなさいよ」

命令口調の声とともに、誰かが中に入ってきた。

「んなこと言っただって、重てえんだよ…」

後ろからはよろよろと大きな荷物を運ぶ、新一の姿。

そして、そのまえには鈴木園子と宮野志保。

一同は啞然としてその光景を見ていた。

「そ、園子…何なのその荷物…」

蘭が口をパクパクさせながらたずねた。

新一は近くにその箱をおくと、ため息をついた。

「何って、お祝いよ！決まってんじゃない」

園子はニヤニヤしながら、箱をあけた。

中にはシャンパンやらワインやらがふんだんに入っていた。

「久しぶりにみんな集まってることだし、パーっと盛り上がりよう！」
「もちろん、おめでたの人はジューズよ」

すっかり親友になっていた志保も、蘭に微笑みかけた。

蘭も笑顔になり、礼を言った。

「ありがとう…」

「そうそう。これ、博士からのプレゼント」

志保は同じ箱から、何やら大きな機械を取り出す。

「な、何それ？」

青子が目を点にさせた。

「自動裁縫機って聞いたわ。これから子供の服とか必要になるだろうからって。この中に布を入れればいいんですって…」

「ほー。そんなら試しに入れてみよか」

平次が面白半分に、自分のハンカチを入れた。

「やめた方が良かったと思うぜ…」
と、新一は言った。

「何でや？」

だが、答えを聞くまでもなかった。

その機械から、作動音とは別の音が聞こえてきた。

そのうち音は大きくなっていき…

「おわっ!？」

「きゃあっ!」

「…な?言つたろ?」

爆発し、見るも無残な姿となる阿笠の発明品と平次のハンカチ。

その場にいた全員が呆然とする。

「と、とにかく、今日は蘭のおめでた祝いだし、皆で飲もう!」

園子が慌てて取り繕い、グラスを配りはじめる。

志保がそれに、シャンパンを注いでいった。

ただし、蘭はジュース。

和葉と青子も遠慮した。

「それじゃ、蘭と新一君の子供の、誕生を祝して…」

乾杯、という前に、再びチャイムが鳴った。

園子は上がっていた手を下げた。

「今度は誰やる？」

「またお祝いに来た人かな？」

和葉と青子がほのぼのと言った。

思えば、このチャイムが、すべての悪夢の始まりだった。

Happy 3

新一は三度目のチャイムも怪しむことなく玄関をあけた。

「はい？」

「あ、あの…こんにちは」

新一はキョトンとした。

目の前には、高校生ぐらいの少女と、弟らしき小学一年生ぐらいの男の子がいる。

「今日向かいに越してきた、沢田っていいです。えっと、今は両親は出かけてていないんですけど…私は、娘の明輝^{あき}で、これは弟の明^あ矢^{きや}です」

明輝はぎこちなく愛想笑いを作る。

「あ、ああ、どうも…」

「これ、つまらないものなんですけど、どうぞ」

明輝は何やら小さな紙袋を差し出した。

「私と母が作ったケーキです。良かったら、食べて下さい」
「ありがとうございます」

戸惑いながらも、新一はそれを受け取った。

「お兄ちゃん、どっかで見たことあるー！」

突如、明矢が新一を指差した。

「コラ！明矢！」

「いや、大丈夫ですよ」

ものすごい剣幕で明矢を怒鳴った明輝を、新一は慌てて止めた。

「すみません…」

明輝は謝ると、明矢を捕まえて無理矢理頭を下げさせた。

「痛いよお」

「人を指差しちゃいけないの！年上の人には敬語を使うの！」

「…はい」

明矢は納得のいかなそうな顔で言った。

「どうしたの？」

蘭が出てきて、キョトンとして姉弟を見つめた。

「ああ…向かいに越してきたんだってよ」

新一は説明すると、二人を紹介した。

「へえ。姉弟？」

「そうです」

明輝はうなずいた。

「なんか…コナン君思い出さない？」

蘭が笑って新一に言うと、新一は少しガクつとする。

「コナンならここにいるぜ…」

「ぜーんぜん、可愛くない奴ならね！」

「あの、突然すみませんでした！もう帰りますから」

明輝は落ち着きのない明矢の腕を掴んだ。

明矢は姉の腕から逃れようともがいている。

「仲いいんですね」

蘭が微笑むと、明輝は苦笑した。

「年が離れてるんで…」

「おいくつなんですか？」

「七歳です」

「いえ、明輝さんは…」

すると、明輝は柔らかく微笑んだ。

「明輝でいいです。私はこれでも二十歳。大学二年生。よく高校生ぐらいに間違われるんだけど…」

蘭は驚いたような顔をする。

「じゃあ同い年だ！」

「本当！？わあ、良かった！近くに同じ年の人がいて」

目を皿のようにして笑う明輝。

蘭も笑い返した。

「良かったら、上がっていかない？ちょうど友達と集まってるの。
皆二十歳の大学生」

「いいの？あ、でも…」

明輝は明矢の方を見た。

「この子もいるから、やっぱり遠慮するね」

明矢は目をまん丸にさせた。

「お姉ちゃん、なんでそんな悲しそうなの？」

「なんでもないよ。お姉ちゃん、超元気！」

明輝は明矢を撫でて、笑顔をつくった。

「らーん、主役がないんじゃないわよ！」

「ごめん、園子。今行く！」

窓から顔を出した園子に向かって、蘭は叫んだ。

「今日はちょっとパーティーやってるの。人数は多い方が盛り上がるし、皆いい人だから」

中からは明るい声が時折聞こえてくる。

明輝は窓と明矢を交互に見つめた。

しかし、やはり少しでも同年代の蘭達といたいのか、笑って頷いた。

Happy 3 (後書き)

パソコンが直ったので更新♪

次回もよろしくです> (´ー´)<

Happy 4

しばらくの間、明輝は他の女子たちと盛り上がっていた。

「へえ。帝丹大学だったの？じゃあ一緒だったんだ」

「本当？私、看護学科にいるの」

「私は法学部だよ」

偶然にも大学まで同じだったと気づき、蘭と手を取り合って喜ぶ。

「看護ってことは、ナース志望？」

園子がたずねると、明輝は恥ずかしそうに言った。

「一応ね。私長女だし、明矢もまだちっちゃいから、これから先両親の面倒見なくちゃいけないでしょ？だから、絶対に何が何でもくならない職業に就きたいと思ってさ」

「しっかりもんやね。あたしとは大違いや」

和葉が情けなそうに言う。

「でも私の場合、動機が単純すぎるもん。…ところで、今日ってなんのお祝い？」

「あ…それはね…」

青子が言いかけそうになった所を、園子と志保が止めた。

「えっ？何々？」

明輝は不思議そうに二人を見た。

「何でもないわ。気にしないでちょうだい」

志保はクールに言い返すと、青子に囁いた。

「彼女は、まだ工藤君が蘭と結婚してるって知らないのよ？」

「あ…そっか」

「もう少し黙っていきましょう」

青子はこくつと頷いた。

「ねえ、ここにいる男の子達って、皆の彼氏？」

そんな会話にも気付かず、明輝は無邪気に聞いた。

新一達は、明矢のヒーローごっこに付き合わされている。

蘭と和葉と青子は、一斉に頬を赤らめた。

「ま、まあ…そんなもんかな」

「近いかもしれへんね」

「うん…」

まさか夫婦だともいえず、曖昧に答える。

「あの三人、どっかで見たことあるなあ…」

明輝は呟くと、考えこんだ。

「もしかして、芸能人？」

「ちゃうよ！あんな色黒男、売れへんもん」

和葉が笑い飛ばすと、青子も快斗を見た。

「あんなバカイトが、芸能人になれるわけないし」

すると、園子も頷いた。

「あの推理オタクも同じね」

「大馬鹿推理之介よ」

蘭が訂正すると、明輝は笑った。

「面白い人たち。好きなのに、言ってることが無茶苦茶だもん」
「そうかなあ？」

青子は首をかしげた。

「顔に書いてある。大好き、って」

その言葉に、再び三人は真っ赤になる。

「か、からかわんというて」

和葉がツンとしていった。

「そ、そういう明輝ちゃんは、彼氏とかいないの？」
「え？私？」

明輝は自分を指差した。

「ん〜。あんま考えたことないや。今まで家のことで色々忙しかつたし」

「でも好きな人とかはいるんじゃないの？」

園子がニヤニヤとして聞いた。

明輝の顔色が、一瞬だけ変わった。

「う〜ん。憧れの人だったら、いるよ」

「へー。どんな人なん？」

和葉が興味心身にたずねる。

「んつとねえ、キラキラしててえ、クールに見えるんだけど、ちょっぴり子供っぽいところが可愛くってえ、見た目とは違う、あつっーい人！」

少し照れたように、明輝は言った。

「それ、憧れじゃなくて、マジなんじゃないの〜？」

「やだ、違うよ」

「どうかしらん」

赤くなる明輝を、園子は小突いた。

どこから見ても、普通の恋をする普通の子。

だが、志保だけが彼女を鋭い瞳で見つめていた。

まるで、彼女の化けの皮を見抜こうかとするように……。

Happy 5

次の日の大学でのこと。

蘭は、休学届を出していた。

初めての出産に向けて、これから家で大人しく準備を進める予定だ。

しかし、心細くはない。

子供が産まれるまで、和葉と平次は定期的にこちらを訪れる予定であり、ここ一週間は泊まることになっている。

園子や志保はもちろん、青子や快斗もしょっちゅう遊びに来ている。

そしていつでも、新一がいる。

問題なのは、彼の仕事の方だが…。

「出産予定日は、大体五月の初め、つてところね…」

大学の近くにあるカフェで、志保は呟いた。

現在医学部に在籍している彼女は、蘭の身体の様子をよく見てくれていた。

「新一君と同じ誕生日になっちゃったりして」

園子がそう言って笑った。

「それならもう忘れないよね」

蘭も笑い返す。

右手をそっとお腹にやる。

ここにもう一つ命があるのだ。

まだ動きもしないほど小さいが、こうしていると、心がホッと温かくなる。

そんな蘭を、園子と志保が、優しい眼差しで見つめていた。

「あっ、いた！蘭ちゃん！」

後ろから突然、笑顔の少女が登場。

「明輝ちゃん」

「えへへ、探しちゃった」

明輝はそう言って、空いていた席に腰かけた。

「どうかしたの？」

園子が急いでいた様子の明輝を見て、不思議そうに言った。

「ううん。私、まだこの辺の地理に詳しくないから…いっしょに帰れないかな、なんて」

「いいよ。あ、でも私スーパー寄ってかなきゃ…」

蘭は困ったように言ったが、逆に明輝は目を輝かせた。

「その方が私もいい！今日も両親遅いから、夕飯作んなきゃいけないんだ」

「じゃあ、もう少し経ったら帰ろっか」

蘭はふと時計を見た。

「あともう少しで来る予定なんだけど…」

「え？誰が？」

すると、今まで黙っていた志保が冷たく言った。

「あなたには関係のない人よ」

「ちよつと志保。もう少し柔らかい言葉で言いなさいよ」

園子が窘めたが、志保はすましてコーヒーを啜っている。

「き、気にしないで。もうすぐ来るっていうのは、新一のこと」

蘭が慌てて言うと、明輝は声をひそめてたずねた。

「ね…その新一君って、あの工藤新一君のこと？」

「そ、そうだけど…」

何故かいつもと違うような明輝に、蘭は動揺しつつも答える。

ところが、明輝の方はパツと笑顔になった。

「わぁ！私ファンなんだ！ご近所だなんて、夢みたい！」

気のせいだったのかと、蘭も笑う。

「本当？」

「うんうん、本当！」

明輝は大きく頷くと、三人を見た。

「ねえ、皆はさ、運命って、信じてる？」

「え？」

「私は信じてるよ…。運命の相手…とか」

そう言った明輝の笑みが、どこか怪しかったことに、やはり志保だけ気付いた。

Happy 6

今日の食卓は、何故だか人が多い。

えーと、ひい、ふう、みい…

「つて、おい！」

「なんだよ、うるせえな」

大声を出した新一に向かって、快斗は顔をしかめてみせた。

「どうしたの、工藤君？」

青子もキョトンとしてみている。

「何でお前らまでいんだよ…」

「何でつて…志保ちゃんに呼ばれたからさ」

快斗に言われ、新一は志保の方を見た。

ところが、志保は気にも留めない様子。

「いいじゃない。大勢のほう楽しいよ」

蘭と和葉がキッチンから料理を運んでくる。

「おっ、美味そうやな」

平次が覗き込んだ。

すると腹が鳴り、平次は笑って誤魔化した。

「蘭ちゃん料理上手ね」

明輝が明矢と共に椅子に腰かけて、料理を眺めていた。

「明矢、美味しそうだね」
「うん！」

明矢が大きく頷くのを見て、蘭は恥ずかしそうに笑った。

「そんなことないよ。全部和葉ちゃんに手伝ってもらったし」
「あたしはほとんど何もしてへんもん。蘭ちゃんが一人でやったんとおんなじや」

和葉がそう言っていると、平次が頬づえをついた。

「そらそうや。和葉がこないな料理、作れるわけないわ」
「なんやて!？」

喧嘩腰の二人をなだめようと、園子が言った。

「はいはい、仲が良いのはわかったから、ご飯にしよう」

園子の手には、二本の瓶がある。

「また飲むの、園子……」
と、蘭が呆れ声を出す。

「パーティーはもう終わったよ」

青子が窘めるように言ったが、園子は笑って言った。

「おめでたいことがあった時は、三日ぐらいは飲み続けなきゃね！」
「オヤジじゃねえんだから、程々にしとけよ」

新一も言っではみたが、すでに園子は全員分のグラスを出している。

「蘭と明矢君は、ジューズね」

「え？蘭ちゃん、お酒ダメなの？」

明輝が意外そうに聞いた。

「今はちよつと控えてるの」

「実際はすごいわよ」。多分、一升瓶は丸ごと飲めるわね」

「園子！」

一滴も飲んでいないのに、蘭は顔を赤くさせた。

「いいからいいから。さ、食べようよ！」

計十人は、それぞれ座りはじめた。

これだけの人数分の椅子があるとは、逆に驚きである。

志保がグラスを配り、園子がシャンパンを注ぎはじめた。

明矢は落ち着きなく料理を見ている。

「おいおい、そんながつつくなよ」

快斗が明矢を見ていった。

「おなか減ったー」

「空腹なんか忘れさせてやるよ。ほら、よく見てろよ……」

快斗が明矢にマジックを見せている間に、全員に飲み物が渡った。

「すごい。本当にパーティーみたい」

明輝が蘭に囁いた。

「それじゃ、今日のお祝いは、明輝ちゃんと、明矢君の歓迎と……」

園子がグラスを持ち上げた。

「蘭の子供の、健康を願って!!」

一人グラスを高く掲げる。

「……あれ?どしたの?」

他の誰も反応しないことに、園子は戸惑った。

「……ねえ」

明輝が口を開いた。

「今の、どういう意味？」

「…あ」

しまったという声を漏らす園子。

それとともに、明輝のグラスが、静かに床に落ちた。

Happy 7

「た、大変！」

「動かんといて」

青子と和葉が、床に散らばったガラスを拾い集める。

「あ、あのね、明輝ちゃん。言いそびれてたんだけど…」

蘭が俯く明輝に向かって言った。

「私と新一は…」

「やだなあ、もう！最初に言ってくれば良かったのに」

明輝は顔をあげると、笑顔を見せた。

「おめでとう、蘭ちゃん！」

「あ、う、うん。ありがと…」

いきなり手を握られ、蘭は戸惑いつつも笑い返した。

「思ったより物分かりがいいみたいね」

志保が園子に囁いた。

「良かったじゃん。言ってみてさ」

「…どうかしらね」

その間も、明輝は早口に話していた。

「うわあ、いいなあ、すごい！ねえ、お腹触ってもいい？」
「い、いいけど…」

やけにハイテンションな彼女に、蘭も困惑した表情。

「ここに、赤ちゃんがいるってことでしょ…？」

蘭のお腹に耳を押し当て、小さな声で言った。

「何だか不思議…。心があつたかくなってくるね」

目をつぶり、まるでそこにいる子供と会話をしているかのように、
明輝は穏やかな顔になる。

「明輝ちゃん…？」

全く動かなくなった明輝を心配し、青子が声をかけた。

すると明輝は目を開け、蘭からも離れた。

「ホントに、おめでとう！」

「何がおめでとうなの？」

明矢がキョトンとしてたずねた。

和葉が屈んで、明矢の目線に合わせた。

「あんな、蘭ちゃんのお腹には、赤ちゃんがおるんやで」

「赤ちゃん？」

明矢が蘭を見つめ、首をかしげた。

「そうよ。産まれたら、一緒に遊んであげてね」

「うん、いいよ！」

和やかな雰囲気の子供たちを見ながら、平次は新一に耳打ちした。

「ええんか、工藤？」

「何がだよ」

「このままにしておいたら、お前んとこの学校、えらい騒ぎになる
んとちゃうか？」

新一はため息をついた。

「かもしんねえけど…ばれちまったもんは、しょうがねえだろ」

「そうそう。念のため、明輝ちゃんには口止めしとくけどさ」

快斗がそう言っつて、新一に向かってニツと笑う。

その時、どこから携帯の音が聞こえてきた。

「あ…ごめん、私の」

明輝は慌てて携帯を手に取った。

「もしもし、ママ？え？もう家？……………うん、わかった。今帰るか
ら」

電話を切ると、明輝は明矢の手をとった。

「ごめん。もう帰んなきゃ」

「また遊びに来てね」

蘭が手をふると、明輝もふり返した。

「今度は、蘭ちゃんの彼氏にも会わせてねー！」

「…えっ？」

蘭は振っていた手を止めた。

「今の、どういうことなん？」

和葉が目点をさせた。

「完璧に誤解しているようね、彼女…」

志保が横目で園子を見た。

「あなたのせいで」

「…ごめん」

そんな会話にも気付かぬまま、明輝と明矢は出ていった。

Happy 8

その後、工藤邸では緊急会議が行われていた。

「で、どうするのよ？彼女、子供の父親が工藤くんだって、理解してないわよ？」

志保が頬杖をついた。

「どうするもこうするも、説明するしかねえだろ」と、快斗が言うが、すかさず和葉が反論した。

「でも、明輝ちゃんがもしも大学に言ったら、ヤバいやろ？もしかしたら、二人とも退学になってまうかも…」

「そこまではせんでも、まあ、呼び出しくらって、停学…ぐらいはありえるかもしれへんな」

平次は腕を組んだ。

「いっそのこと、蘭ちゃんはシングルマザーだ、って通しちゃえば？」

青子が言った。

「別れた彼氏との子供なんだ、とか言って」

「それでその元彼の所に行こう！とか言い出したらどうすんのよ？あの子のことだし、何言いだすかわかんないわよ」

園子が手を振って否定した。

「じゃあどうしろっちゅうねん!？」

「それを今考えてんでしょ！」

「お、落ち着いてよ、二人とも…」

睨みあう平次と園子に、蘭が割ってはいる。

「明日、明輝ちゃんには私から話すから。変に誤解されてたらやだし」

「そうだね…。蘭ちゃんがそう言うなら、青子は賛成！」

青子はニコツと笑った。

「それで良いんじゃないか？」

「せやな。ねえちゃんの思った通りにやるのがええやろ」

快斗と平次も頷いた。

「もちろん、私達も反対しないわよ！」

と、園子が和葉と志保の肩を抱きながら言った。

「んで？肝心の父親の方はどうなのよ？」

園子の一言で、今まで全く口を開かなかった新一に、視線が注がれる。

「あ…まあ、オレは良いと思うぜ」

新一は慌てて答えた。

少し様子がいつもと違ったが、誰も何も言わなかった。

「それじゃ、決定！ま、明輝ちゃんには気の毒だけど、ちゃんとして事実を認めてもらわなくっちゃね」

「気の毒って…何でなん？」

和葉がキョトンとしてたずねた。

「この間、彼女が言ってたのよ。工藤新一のファンなんだ、ってね」
「へえ」

平次は黙りこくっている新一の肩を叩いた。

「おい。どないした、工藤？」

「ボーっとして…何考えてんだよ」

声をかけた平次と快斗に、新一は体をびくりと震わせた。

「な、なんでもねえよ」

「…なんか、怪しいな」

「オレらに隠し事しとるんとちゃうか？」

二人の疑いの籠った目に、新一はたじろぐ。

しかし、すぐに目を逸らしてもう一度、何でもない、と言った。

「お前、嘘つくの下手なやつだなあ」

「はあ！？」

「そないな顔したら、すぐに姉ちゃんにもばれるで？」

新一は蘭を見た。

今は楽しげに笑っている。

だが、新一はなぜか表情を曇らせる。

「なんか…嫌な予感がすんだよ。これから何かが起きるような…」
「不吉なこと言っなあ、お前…」

快斗は呆れた目をしたが、新一は至って真面目な顔をしている。

「ただの予感で終われば、良いんだけどな…」

その重たい一言に、平次も快斗も何も言えなくなった。

Happy 9

帝丹大学前の、小さなカフェの中。

自動ドアが開く音がする。

蘭は振り返った。

これでもう五回目。

しかし、待っている人物はなかなか来ない。

思わず時計を見やる。

一時四五分。

確か、約束の時間は三十分だったはず。

まさか、忘れているとか…。

考えを働かせることに夢中になっていた蘭は、突然うしろから肩を叩かれ、体全体をびくりとさせた。

「あ、明輝ちゃん」

「ご、ごめん、遅くなって…。なんか考えてた？ すごくびっくりしてるけど…」

明輝は目を丸くさせて、蘭を見た。

「う、ううん。何でもない。こっちこそごめんね。急に呼び出した
りして」

「大丈夫！私は結構、嬉しかったからさ」

明輝はニコツと笑って、向かいの席に腰かけた。

「あゝ。のど渴いたっ。授業は退屈だし、抜けるに抜けられないし
でさ。なんか頼もうよ。すいませーん！」

蘭の返事を待つことなく、明輝は手をあげて、店員を呼んだ。

「私、アップルティー！蘭ちゃんは？」

「えっと…じゃあ、コーヒー」

すると、明輝はなぜかダメ！と叫んだ。

「いい、蘭ちゃん。今はカフェイン摂っちゃダメだよ？大事な体
なんだし、気をつけなきゃ！あ、この人には、オレンジジュースを」

てきばきと注文を済ませる明輝を、蘭はポカンとして見つめた。

「何？」

「あつ。ごめん、つい…。なんか明輝ちゃん、お母さんみたいだね」

明輝は吹き出した。

「あははっ。よく言われる！ほら、明矢が産まれる前とか、うちの
ことやってたのって、ほとんど私だったからさ。自然となれちゃっ
たっていうか…」

「でも頼りになるもん。ありがとつ、明輝ちゃん」

蘭の言葉に、明輝は微笑んだ。

「これぐらいどうってことないよ！だって私、もうすぐ看護師になるんだよ？蘭ちゃんたちの健康管理は任せて！」

「じゃあ、志保と組んだら最強ね」

「そう？あ、志保ちゃんて、医学部なんでしょ？格好良いよね」

穏やかな世間話をする中、蘭は迷っていた。

どう話を切り出そう。

いきなり言うのも、気が引ける…。

「それでさ…。…蘭ちゃん？」

「へっ？あ、な、なんだっけ？」

慌てて笑顔を作って聞くが、明輝は真面目な顔になった。

「そう言えば、話があったんだよね？私ってば一人でベラベラと…」

「いいの。あの、それでね…」

蘭が話したそうとすると、明輝はそれを制した。

「大丈夫よ。私、誰にも話してないから。明矢にも口止めしてあるし」

「そ、そう…」

「まあ、大学側としちゃあ、聞こえが悪いからね。自分の学校の生徒が妊娠してる…なんてさ」

そう言ってから、明輝はハッとして蘭を見た。

「ごっ、ごめん！別に私、悪く言ってるつもりじゃ…」

「わかってるよ。平気」

蘭がそう言つと、明輝はホッとしたように頬を緩めた。

「でも、明輝ちゃん。私が言いたかったのは、新一のことで…」
「それぐらいわかってるよ」

再び話を遮り、明輝は頬杖をついた。

「なんかおかしいと思ってたんだ。二人の雰囲気、他の子たちと違つてたからさ…」

そつ明輝が言つと、蘭は安心した。

なんだ、ちゃんと知ってたのか。

大慌てして損した…。

「つまり、兄妹でしょ？」

「…え？」

「蘭ちゃんと、工藤君。だよね？」

「え、えつと…」

蘭が混乱して口をきけないでいると、明輝は早口にまくしたてた。

「やっぱそうよねえ！一緒に暮らしてるっばいし、名字も同じだし。」

最初は絶対彼女かと思ったけど、なんか違うな、って思ってたのよ！」

ええ、確かに彼女ではありません。

なぜなら妻だから！

一人で納得して頷いている明輝に、その一言が言えない。

「ち、違うの、明輝ちゃん！新一と私は…」

「ん？でも二人は同じ年だから…あーっ！わかった！血がつながってないとか？親の再婚で兄妹になっちゃった、って感じでしょ？当たり？」

ブブブー。

はっずれ。

…とも言えず。

「あ、あの…。まあ…え」と…

「それで父親代わりになってるってところかな。うん。我ながら良い推理だわ。私、探偵になれるかも！ね、そしたら工藤君の助手とかなれる？今度聞いてみて！」

もはやそつだと信じ切っている明輝に、蘭は何も言う気がしなくなつた。

「どうしたの？あつ。具合悪い？そつだよ、妊婦を長く待たせてた私も馬鹿だわ…。家まで送ってくよ。立って」

黙ってしまった蘭を見て、明旗は別の意味に解釈したらしく、まだ一口も飲んでいない飲み物にお金を払ってカフェを出た。

「ごめんね、蘭ちゃん」

「だ、大丈夫。なんともないから…」

「ほんと？良かったあ」

屈託のない笑顔を見せる明輝に、蘭もつられて笑った。

人の話を聞かないことが難だが、決して悪い子ではない。

現に、自分の身体をこんなにも心配してくれている。

新一のことは、また時間を見つけてゆっくりと話そう。

呑気にそう考えていた蘭に、明輝は言った。

「ねえ蘭ちゃん」

「何？」

「突然だけどさ…」

視線がぶつかりあう。

「工藤君、私が貰ってもいい？」

Happy 9 (後書き)

明輝ちゃんの勘違いは続く… (汗)

次回もよろしくです> (――) <

当然のことながら、蘭はしばらくの間、呆然と明輝を見ていた。

「いいでしょ？ね？」

「そ、それは…」

「だって兄妹だよ？彼女じゃないんでしょう？私、本当に工藤君が好きなんだ。憧れとかじゃない。本気なの！」

明輝の真剣な目から、顔を逸らすことができない。

ダメと言えたら、どんなにいいだろう。

しかし、それはできなかった。

おなかの中にいる、子供のためにも。

「わ、私と言えることじゃないから…。ごめん」

そう言うのが、精一杯だった。

明輝は少し落ち着きを取り戻すと、深く息を吐いた。

「そうだね…。変なこと言っちゃって、ごめんね」

「ううん。いいの」

「でも、諦めないよ、私」

明輝は、まっすぐに蘭を見た。

「蘭ちゃんは、応援してくれる?」

再び返事に困っていると、明輝は笑った。

「そんな顔しないでよ!何も蘭ちゃんに、工藤君から離れろって言うてるわけじゃないんだしさ」

「う、うん…」

「それでもさ、友だちなら、頑張ってたって言うてくれるよね?」
「…うん」

蘭が小さく頷くと、明輝は嬉しそうに蘭の手を握った。

「ありがとう!蘭ちゃんが一緒なら百人力、ううん。一万人力!」

その眩しいぐらいの笑顔に、蘭は心苦しさを覚える。

いつか、彼女の涙を見ることになるかもしれない。

泣かせるのは、この私だ。

蘭から話を聞き終えると、園子が勢いよく立ちあがった。

「私が話つけてくるわ」

「ス、ストップ！」

まるで殴りこみにいくかのような形相に、蘭は慌てて園子を止める。

「蘭！早くしないと、新一君、本当に明輝ちゃんに取られちゃうよ？」

「うん……」

「善は急げ！行くわよ！」

「だから待つてよ」

蘭は園子と共に椅子に座ると言った。

「言わないでおきたいの」

「……彼女に？」

志保が無表情で聞いてきた。

「だって、なんだか……辛いと思うの。好きな人が、別の誰かと結婚してるなんて。私だったら絶対に嫌」

「そんなこと言ったって、それが事実ならしょうがないよ」

園子が不服そうに言った。

「確かにそうなんだけど……でも、嫌なの」

頑と言い張る蘭に、園子は何か言おうとしたが、そのまえに志保が口を開いた。

「あなたが決めたことなら良いんじゃない？私は何も言わないわ」

それを聞くと、園子も口を閉ざした。

「ま、彼は反対でしょうけど」
「彼？」

園子が聞き返すと、志保は頬杖をつきながら言った。

「工藤君よ。彼ならきつと、蘭は自分のものだって堂々と言い張りたいって感じてでしょうし」

「ありうるわね」

二人が頷くのを見て、蘭は苦笑した。

「それはないと思うけど……」
「甘いわね、蘭」

園子がニヤニヤとした。

「あの男は、独占欲の塊みたいなもんよ」

志保も微かに口角をあげた。

「見ていて面白いとは思うけどね」

そう言うてから、ふと時計に目をやる。

「私、次の講義はじまるから行くわ」
「うん。…志保」

教室に向かおうとする志保を、蘭は呼びとめた。

「ありがとう。ホントに」

「…馬鹿ね」

志保は言った。

「あなたがそう言ったから、私は賛成しただけ。何もしてないわよ」

志保は少し微笑むと、歩き出した。

「…私も一応味方ですけど？」

園子は、少し不満気な顔をした。

「はいはい。ありがとう、園子」

「いえいえ、それほどでもあるわよん」

蘭はクスツと笑った。

嫌な予感がする。

志保は教室に向かいながら、眉間に皺を寄せていた。

本当に、これですべてが解決してくれるのだろうか…。

Happy 11

その次の日のこと。

朝から工藤邸に、チャイムの音が響き渡った。

「何や、朝っぱらから…」

平次が欠伸をしながら出てくる後ろで、和葉も目をこすった。

「誰なん？一体…」

「ちよつと出てくるね」

蘭はそう言って、玄関を開けた。

「はい？」

「おはよ！」

明輝は満面の笑みを見せた。

「お、おはよう…。どうしたの、こんな早くから」

「花嫁修業よ！」

「…はあ？」

蘭が混乱した表情をしていると、明輝は勢いこんで言った。

「今日から、私ここで修行することにしたの！ほら、工藤君って有名だから、お嫁さんもちゃんとしてなきゃじゃん？」

その言葉に、思わず蘭はぐさつときた。

それを誤魔化すように蘭は笑顔を浮かべる。

「でも新一なら、まだ寝てるから…」

「それなら私が起こす！」

明輝は気合十分に言うど、ずかずかと上がり込んだ。

「あ、明輝ちゃん？どないしたん？」

「和葉ちゃん、私ね、工藤くんのお嫁さんになるための、修行中なの！」

「えっ？」

和葉は驚いたように蘭を見た。

蘭は困ったように見返した。

「工藤の嫁？って言ったか」

平次はすっかり眠気も覚めた様子でたずねた。

「そうよ！」

明輝は自信満々に答える。

すると、平次は爆笑した。

「そらねえちゃん、無理や、無理！」

「何でしょう？」

「工藤はな、もうすでにかみ…」

和葉が咄嗟に、平次の横っ腹を殴る。

「いったいわ、ボケ！何すんねん！？」

「ちよつとアンタは黙っとき！」

明輝は不思議そうに平次を見た。

「かみ？何、それ？」

「な、何でもない！気にせんというて」

和葉が慌てて言うと、明輝はまだ怪訝そうな顔で二人を見ながらも頷いた。

「で、工藤くんのお部屋は？」

「う、上…」

「お邪魔しまーす」

階段を勝手に上がっていく明輝。

「あつ、明輝ちゃん！？」

蘭も急いで追いかける。

しかし、突然明輝は止まった。

今度はどうしたのかと、蘭は明輝の前方を見た。

「おはよう！工藤くん」

「あ、ああ…」

新一は困惑した目で明輝を見たあと、視線を蘭に移した。

蘭がどう言おうかと迷っていると、明輝が口を開いた。

「朝ごはんはトースト？それともご飯？」

「え？あ…ト、トースト…？」

明輝はニコツと笑うと、下におりた。

「おい、何なんだよ、急に」

「しばらく話合わせて。お願い！」

「はあ！？」

蘭に手を合わせられ、新一は余計に戸惑う。

「何があつたんだよ？」

「わけはあと！とりあえず来て！」

そう言つて、蘭は新一の手を引つ張り階段をおりる。

階段の脇に、和葉が立っていた。

蘭と新一を見て、キッチンに目を向けた。

「明輝ちゃん…朝ごはん用意するって言つてるけど」

「何でアイツが」

「わかった。新一はさっさと着替えて！」

蘭は新一を黙らせると、有無を言わさぬ口調で新一を洗面台へ追いやる。

「どないする気なん、蘭ちゃん…」

「どうもしないよ」

困り顔の和葉に、蘭は力強く言った。

「だって、新一のことが好きなのは、私も明輝ちゃんも一緒なんだもん」

Happy 12

次の日も、そのまた次の日も、明輝は工藤邸を訪れた。

「はあゝい。明輝ちゃん特製、ビーフシチューだよん」

今日も明輝は、小さな顔に満面の笑みを浮かべてやってきた。

「明輝ちゃん、ホンマに料理上手なんやね」

和葉が皿の中身を覗きこんで言った。

「親が忙しいからさ。よく明矢に作ってたの」

明輝はそう言って、サラダの入ったボウルを真ん中に置く。

「別に毎日作ってくれなくても…」

蘭は戸惑ったように言うが、明輝は笑って答える。

「ダメダメ！これは私の修行なんだから。それに、おめでたの人は、ジツとしてなきゃね！」

「でも、少しぐらい動いても平気よ」

そう蘭が言つと、隣に腰かけていた志保が言った。

「そうね。運動もせずに座っているだけなら、逆に危険なケースに陥る可能性もあるし。いつもの自分と同じことをしている方が、精

神的にも安定するわ」

「んで…」

新一が口を開いた。

「何でまたお前がいんだよ？」

「あら、悪い？良いでしょ。博士、今いないんだから」

志保はツンとして言った。

「だからって、毎晩ここ来て飯くうことは…」

「はいはい、喧嘩はいけません！料理が不味くなっちゃう」

二人を裂くかのように、明輝は二人の間にパンをおいた。

新一はまだ何か言いたげな顔をしていたが、その前に誰かに服を引っ張られた。

「お兄ちゃん。仮面ヤイバーごっこ！」

「げ…。い、今か？」

明矢はこくと頷く。

「もう飯の時間や。我慢しい」

平次がそう言っで明矢を座らせようとしたが、明矢はそんな気はさらさないらしい。

「出たな、怪人め！退治してやる〜！」

「おわっ！？座れって！」

新一は明矢の襟首を掴んだ。

それでも明矢は遊びたいらしく、暴れて逃げようとしている。

「明矢！言うこと聞かないんなら、お家でお留守番よ」

様子を見た明輝が、明矢に向かって怒鳴った。

「やだ！パパもママもいないもん！」

「それなら、お兄ちゃん達に迷惑かけないの！」

「遊びたい！やーだあゝ！」

終いに、明矢は泣きだした。

「泣かないの！男の子でしょ！」

「だって……」

「そんな泣き虫、お姉ちゃん知らないぞ！お家からポイって出しちゃうから」

それを聞くと、更に明矢は泣き声をあげる。

「明矢！」

「ま、まあまあ、明輝ちゃん」

蘭は明輝をなだめようと、肩に手をおいた。

「そんなに怒らなくても……」

「ダメよ。怒る時は、ちゃんと怒らなくちゃ」

「でもそこまで…」

「それじゃ、良い母親になんかなれないよ、蘭ちゃん!？」

突然、明輝は蘭に向かって叫んだ。

「闇雲に愛情を注ぐだけじゃ、子供は育たないの。そんなこともわかんないの!？」

「あ、明輝ちゃん。もうやめよ。蘭ちゃんは何も、悪くないよ」

和葉がそう言っていると、明輝は落ち着きを取り戻した。

「…ごめん。ついカツとなっちゃって…」

しゃくりをあげている、明矢にも目を向ける。

「いつまで泣いてるつもり？」

「うえ…」

明輝が再び怒鳴り出しそうに見えたのか、新一が慌てて明矢に言った。

「よ、よし。明矢、飯食ったら、遊ぼうぜ。な？」

「せ、せや!腹いっぱいになったら、好きなだけ遊べんで」

平次が横から付け足すと、明矢はまだ赤い目で二人を見てから、うん、と言った。

「そんなら、食べよ!せっかくの料理、冷めてまうし」

「そうだね。ほら、皆も座って」

和葉と蘭の言葉で、全員が静かに椅子に座りはじめた。

「明矢君。遊ぶのも良いけど、まずはご飯よ。ね？」
「はあい」

志保に手を引かれ、明矢は椅子によじ登った。

「ありがとね、工藤くん」
「あん？」

明輝は新一に微笑んだ。

「私、明矢にしょっちゅう怒鳴ってるから、つい…。工藤くんのお陰で、ちよつと歯止めがついた」
「いや…大したことはしてねえよ」

新一は照れを誤魔化すように頬をかく。

「工藤くんはさ、きつといいお父さんになれるよ」
「そ…そうか？」

新一は、ふと蘭の方を見た。

「蘭？」

箸の進まない蘭に、新一は声をかける。

「顔色わりいけど…どうかしたのか？」
「あ…う、ううん。何でもない」

蘭は首を振ったが、その顔にはいつもの笑顔はない。

「具合が悪いなら、病院に行った方がいいよ？」
と、明輝が言ったが、蘭は平気だと言う。

「あとで私が診るわ」
「大丈夫。ありがとう」

志保の申し出にも蘭は頷かず、無理矢理料理を口に運んでいる。

「あつ。これ美味しいね！皆も食べなよ」

その後、会話もなく食事が進む。

新一は途中、何度か蘭に目を向けたが、やはり顔色が優れない。

やがて食事が終わり、明輝が皿を片づけようと立ち上がった。

「あ、私も手伝うよ」
「いいよ。座ってて」
「ううん。本当に大丈夫だから」

そう言つて蘭は、ゆっくりキッチンに行った。

「お兄ちゃん！約束でしょ？遊ばし！」
「ハイハイ……」

新一と平次は、明矢に手を引っ張られて渋々と立ち上がった。

「それじゃ、私も帰るわね」

と、志保も工藤邸を出ようとした。

和葉も明輝と蘭を手伝おうと立ち上がる。

その時…。

がたつと音がして、全員が振り返った。

「蘭!？」

「蘭!？」

全員が慌てて蘭のもとへ駆け寄った。

「どないしたんや？」

「蘭ちゃん、しっかり!」

平次と和葉が、蘭の身体を上半身だけ起こした。

蘭が苦しそうに顔をゆがめた。

「どいて!」

志保が鋭く声をあげる。

二人に蘭を横たわらせるように言うと、志保はペンライトを取り出した。

「大丈夫よ。誰か、救急車を呼んで!」

素早く蘭の容態を見る。

「どうだ、宮野…」

「青酸系の毒物ね。でも、致死量には至ってないから、すぐに治療すれば助かるわ」

新一の問いかけに、志保は小さく答えた。

「ど、どうして…」

明輝が声を漏らした。

顔が青ざめている。

明矢が隣でキョトンとしているのが、ミスマッチだった。

「救急車呼んだか？」

「う、うん」

新一は和葉が頷くのを見ると、蘭の手を握った。

「しっかりしろ、蘭！」

蘭が薄く目を開けた。

揺ら揺らしていて、焦点が合わない。

「蘭！大丈夫か！？」

それでも声をかける新一に、なんとか蘭は目を向けた。

「…ん…い、ち…」

声を絞り出し、何か伝えようとしている。

「どうした？」

「く…る、し…」

そう言うと、喉元を手で押さえた。

志保が脈拍を測る。

「もうすぐ、救急車来るからな！安心しろ！」

新一が言うと、蘭は目を閉じた。

「脈が速いわ…」

「博士に車を出してもらった方が…」

「いないわよ」

「そうか…ああ、クソッ」

新一は髪をぐしゃっとさせる。

「工藤くん、苛々しないでくれる？」

「だ、だからって…」

「静かにして！」

「…はい」

志保は再び蘭に目を向けた。

蘭の蒼白い顔を見ながら、自分の悪い予感が当たってしまった、と感じた。

ごめん…

心の中で、蘭に謝罪する。

自分がそう思ったから、彼女は本当に、こうなってしまったのかも
しれない。

そう思うと、自分が酷く恨めしい。

「…志保さん？」

和葉が志保の肩に手をおいた。

「顔色悪いで？あたし、代った方がええかな」

「いえ…。平気よ」

志保は首を振って、今の考えを追い出した。

今は彼女の応急処置に専念しなければ。

犯人を追及するのは、その後だ…。

救急車のサイレンが聞こえたのは、その十分後。

その日のうちに、蘭は米花総合病院へ緊急入院をした。

応急処置が早かったため、母体もおなかの子も無事だった。

「ありがとな、宮野」

「当然のことをしただけよ」

礼を言った新一に、志保はさらりと返した。

「それより、なぜ彼女が青酸カリを飲まされたのか。じゃないの？」

「あ、ああ……」

二人が難しい顔をしていると、バタバタと足音がして、慌てた様子の友人たちが姿を見せた。

「新一くん、蘭は？」

と、園子がたずねた。

「今はねてる。面会は出来ねえって」

「何があつたんだよ？」

快斗がいつになく真面目な顔で言った。

「わからねえ。だけど……」

「どこかに青酸カリが仕込まれとったんや。工藤んちにいた、誰かの手によつてな」

新一の言葉を受け継ぎ、平次が言った。

「でもそれやったら、あたしらも容疑者になるんやろ？」
と、和葉が表情を険しくさせる。

「あたし、蘭ちゃんを殺そう思う人なんか、知らへんもん」
「青子も」

「わ、私も…」

和葉と青子、園子が俯いた。

「さっきいた、あの向かいに住んどるねえちゃんは？」

平次がキョロキョロとあたりを見回した。

しかし、明輝の姿はない。

「弟さんがもう寝る時間だし、自分も少し冷静になりたいからって
言って、帰ったわ」

そう志保が答えると、快斗は妙だな、と呟いた。

「友だちが毒を飲まされたつてのに、すぐ帰っちまったのかよ」
「快斗、明輝ちゃんのこと疑ってるの？」

青子は目を見開いた。

「何だよ！」

「せやせや！明輝ちゃんがなんで蘭ちゃん殺さなアカンの！」

女子二人の勢いに、快斗は圧倒されつつも手を振った。

「そ、そういうことじゃねえよ。ただ、ちょっとおかしいなーと…」
「でも確か、明輝ちゃんて、新一くんのファンじゃなかったっけ？」

園子の一言で、平次がなるほどと言った。

「そんなら、話はあうで。あの姉ちゃんが工藤とねえちゃんの関係壊したる思うて、ねえちゃんに毒を盛った、っちゅうことやろ」

その時、新一の携帯電話が鳴った。

「はい、工藤です」

新一は少し全員から離れると、電話に出た。

そこから、お馴染みの刑事の声が聞こえてくる。

『工藤くん。この料理は、蘭さんが作ったものなのかい？』

「いえ。違いますよ、高木刑事」

『そうか、やっぱり…』

高木がため息をついたのがわかった。

「料理ですか？」

『そうみただよ。それも、蘭さんのシチューにだけね。犯人としては、蘭さんしか殺す気はなかったみたいだよ』

「そうですか…」

『それで、料理を作った人は…』

「僕の向かいの家に住んでいる、沢田明輝さんですよ。今は自宅に
いると思います」

『わかった。それじゃ、またあとでかけるよ』

「ありがとうございます」

電話を切ると、志保が何て？と聞いてきた。

「青酸カリが入っていたのは、蘭のシチューだけだったってよ」

「それ作ったの、あの明輝さんとかいう人じゃなかった？」

「そうだな…」

でも、と和葉が言った。

「明輝ちゃんやっていう証拠はないんやろ？」

「それやったら、犯人は、オレと工藤、和葉と宮野のねえちゃんの
中ってことになるで」

「いや、もう一人いんだろ」

快斗が口を挟む。

「蘭ちゃん自身だってことも、視野に入れとかないとな」

「そんなわけないじゃない！このバカいと！」

青子が怒鳴ったが、新一は何も言わなかった。

「ね、ねえ工藤くんもそう思うでしょ？」

「蘭が自分で毒を飲むなんてこと、するわけないでしょ！？」

園子も祈るような目で言うが、新一は言った。

「青酸カリが料理に入っていたとしたら、普通は味の変化で気付くはずだ。なのに蘭は全部食べた。てことは、蘭はやはり自分で毒を入れたか…」

「誰かを庇っているか…ってか」

快斗が吐き捨てるように言うと、青子が手で顔を覆った。

「なんで…」

それでも、志保は冷静さを失わないよう、務めていた。

「まだ決まったわけじゃないけど、彼女が誰かを庇っているというのも、頷けるわ…」

「蘭ちゃんは優しすぎるで…」

和葉が目には涙を浮かべた。

園子は和葉の肩に手をおいた。

「私らで突きとめよう。蘭を殺そうとした奴のこと！」

「青子も！青子だって、犯人捕まえてやりたい！」

三人が力強く頷いた。

「志保さんやって、そうやる？」

「…当たり前でしょ」

そう言うと、志保もその中に加わった。

「さあ、何が何でも蘭に毒をもった犯人を捕まえるわよ！！」

園子がぐつと拳を握った。

女子たちが一致団結しているのを見ながら、新一は考え込んでいる様子だった。

「工藤」

「大丈夫かよ」

平次と快斗が声をかけるも、聞いていないようだ。

「なあ」

突然新一は言った。

「今何時だ？」

「は？」

「何言ってるのや、工藤」

二人が聞き返すも、新一は鋭い口調でもう一度たずねてきた。

「今何時だよ！？」

「よ、夜の十時半ぐらい…だろ」

快斗が驚きながらも答えると、新一は走り出した。

「お、おい、新一！？」

「わいい、オレ行く所あつから！」

そう言うと、新一は病院を飛び出した。

「な、なんや、一体…」

平次が呆然とつぶやいた。

「何かあったら私が止めるわ。あなた達は、彼女についていて！」

志保が新一の後を追った。

静かな病院内に、二人の足音だけが響き渡っていた。

新一はある家の前で止まると、肩で息をしながらもチャイムを押した。

時間ももう遅く、家主が出てくるまでも、少しかかった。

「はあゝい」

中から四十代後半の女性が出てくる。

新一と、その後ろにいる志保を見つめ、一瞬きよんとした。

「夜分にすみません。明輝さんとお話したいことが…」

「あらあ！あなた、工藤新一くんでしょう？」

女性は新一の言葉をさえぎって、甲高い声をあげた。

「明輝から話は聞いてるわあ。すつごく有名なんですよ？若いのに、立派ねえ」

「あ、あの、僕は明輝さんに…」

「それに、イケメンだしねえ。もてるんじゃないの？明矢も遊んでくれて、あなたのことが大好きになっちゃったみたいだし…」

新一はため息をついた。

志保も呆れかえって新一と目を合わせた。

どうやら、明輝の人の話を聞かない性格は、母親譲りらしい。

「もうねえ、お兄ちゃんみたいなの、つてずうつと言ってるんだもの。明きもちよつと妬いてるみたいでね、家帰ってきたら、さつさと部屋に引きこもっちゃったのよお」

「さ、沢田さん。明輝さんは…」

「いつそのこと、本当にお兄ちゃんになってくれたりしないかしら？なんてね。やだあ！冗談よ。そんな顔しないで。でもちよつと考えてくれたら嬉しいかも」

もはや新一の言うことなぞ、何も聞いていない。

痺れを切らした志保が、前に進み出た。

すると、明輝の母親は、ようやく新一に連れがいることに気付いたらしい。

「あら…。そちらの美人さんは？」

「え、えつと、彼女は…」

「私達、明輝さんの大学の友人なんです。今日彼女にノートを借りっぱなしだったんで、それを返しに。明輝さん、まだ起きてらっしゃいますか？」

母親は、それなら早く言ってちょうだいよと言いながら、家の中に向かって、明輝！と叫んだ。

すぐに明輝が姿を見せた。

二人を見て、玄関に駆けてきた。

「蘭ちゃん、大丈夫なの？」

「今は病院で寝てる」

新一が答えると、明輝はホッと息をついた。

「良かった…。帰ってきちゃったけど、ずっと気がかりだったの。
で、どうしたの？」

「蘭が食ったシチューにだけ、青酸カリが入ってた」

明輝の表情が、わずかに変わった。

「それって…毒、だよな？」

「ええ。あと少しでも量が多かったら、母子ともども危険だったでしょうね」

志保が告げると、明輝の顔がこわばった。

「誰がそんなこと…」

「確認すつけど、あのシチューって、お前が作ったんだよな？」

「うん。そうだけど…」

新一の問いかけに答えてから、明輝はハッとしたように言った。

「ま、まさか、私のことを疑ってるの、工藤くん!？」

それでも、新一の表情は変わらない。

「酷いよ！私が何で、蘭ちゃんを殺すの!？友だちだもん。そんなことしないよ…」

明輝は目に涙を浮かべて訴える。

「確かに、今日のみんなのご飯は、私が作ったよ。でも毒なんていれてない。誓ってもいい」

「それじゃ、お前は本当に無関係なんだな？」

新一が念を押すようにたずねると、明輝はこくつと頷いた。

「そんならいいんだけどよ」

そう言うと、新一は背を向けた。

「ねえ工藤くん」

その新一に、明輝は声をかけた。

「犯人、捕まえてくれるよね？」

「…ああ。何が何でもな」

新一が歩き出すと、志保もそれに続いた。

「ねえ。工藤くん、上がっていかない？…あら？」

「まま、工藤くんなら、帰ったよ」

「え？そうなの？残念ねえ」

明輝の母親は、つまらなそうに口を尖らせた。

「ああいう子が息子になってくれたら、ママも嬉しいんだけどなあ」
「高望みすぎよ、ママ」

明輝は母親に向かって笑った。

しかし、その笑顔がどこか暗い光を放っていたことに、母親は気付かなかった。

Happy 16

入院から一週間後、蘭は普通の病棟に移った。

この回復力は、医者も目を丸くするほどだった。

「良かったね、蘭」

「もうマスク越しに話なくてもすむわね」

蘭の乗る車椅子を押しながら、園子と志保が話しかける。

「ありがとね、二人とも」

「水臭いこと言わないの！」

園子は軽く蘭の背中を叩いた。

「ところで…あなた、本当に何も気づかなかったの？」

志保が声色を低くしてたずねた。

蘭の表情が少し暗くなった。

「う、うん…。ごめんね」

「…良いのよ、別に。怖いこと思い出させて、ごめんなさい」

せっかく元気になった蘭が目を伏せているのを見て、園子が明るい声を出した。

「そうそう！今日はね、あとで和葉ちゃんと青子ちゃんも来てくれるって！」

「わあ、ほんと？」

「うん。あ、そうだ。明輝ちゃんもって言ってた」

蘭は笑顔を見せた。

「そっか。楽しみだなあ……」

「それまで、あなたは安静にしてなきゃダメよ。さ、病室に戻るわよ」

「わかりました、宮野先生」

三人はクスクスと笑いだした。

病室に着くと、志保がドアを開けてくれた。

二人で蘭をベッドに寝かせる。

「そういえば、新一くんは？」

今さらだが、園子は言った。

「さあ。今日はまだ来てないの」

「工藤くんなら、今朝、服部くんと黒羽くんと一緒に、どこかへ出かけていったわ」

それを聞くと、園子は顔を険しくさせた。

「あの推理バカ……。自分の女房のピンチに友だちと遊び歩くなんて……」

「そんなこと言わないの。アイツ、今までずっといてくれたんだから…」

蘭が苦笑気味に言うと、志保は口角を微かにあげた。

「どつりで最近、彼の家に明かりがついていないと思った」
「帰ってもないの？」

園子が呆れたように言った。

「ここで寝泊まりしてるみたい。だけど、私が寝る前に一旦出てっちゃうから、私もよくわからないのよね」

その時、病室のドアがノックされる音がした。

「どうぞー」

蘭が答えると、和葉と青子が遠慮がちにはいつてきた。

「蘭ちゃん、もう大丈夫なん？」

和葉が小さな声でたずねた。

「うん。もう平気」

蘭が大きく頷くと、二人揃って、安堵の息をついた。

「良かったあ。心配してたんだけど、なかなか来れなくて」

青子がギョッと蘭の手を握った。

「でも安心した！思ったよりも元気そうで」

蘭は青子に微笑みかけ、青子の後ろに隠れるようにして立っていた人物に目を向けた。

「明輝ちゃん？どうしたの？」

明輝はばつが悪そうな顔をした。

「あの…なんか、どう声かけたらいいか、わかんなくって」
「何で？」

蘭が聞き返すと、明輝は目を伏せた。

「だって、蘭ちゃんが倒れたのって、私が作ったシチューが原因らしいし。それって、私の所為ってのもあるんじゃないかな…って」
「そ、そんなことないよ！」

蘭は慌てて言った。

「あれはただの事故みたいなものよ！明輝ちゃんは何にも悪くない」

明輝はパツと笑顔を作った。

「それなら良かった。内心、すごく不安だったんだ。蘭ちゃんが私のこと責めてるんじゃないか、って」
「全然！」

蘭は笑って答える。

「明矢くんは？」

「一緒に来てるよ。蘭ちゃんの所に行くのって言ったら、自分も行くって聞かないんだもん。今はジューズ買いに行かせてる」

すると、ドタドタと足音がして、明矢が飛び込んできた。

「お姉ちゃん、お金！」

「えっ？あ、ごめん。渡してなかったね…」

明輝は慌てて明矢にお金を渡す。

「ね、明矢。お姉ちゃんたちお話あるから、皆の分も買ってきて来れる？」

明矢は首を横に振った。

「そんなにいっぱい持てないよ」

「そ、そっか…。しょうがない。私行ってくるね」

明輝はそういうと、財布を片手に病室を出た。

「慌てん坊やね、明輝ちゃん」

和葉はクスツと笑った。

「でもお姉ちゃん、茶髪のお姉ちゃんのこと、慌てん坊さんって言うてたよ！」

明矢は園子を指差して言った。

「えっ？わ、私？」

園子はきよとした。

「へー。そんなこと言ってたんだ。じゃあさ、青子のこととは何か言ってた？」

「んっとね、少し子供っぽそうだけど、可愛い人って言ってた」

青子はそれを聞くと、微妙な顔をした。

「やっぱ子供…」

「そんなら、あたしは？」

和葉は自分を指差した。

「色が白くて、ポニーテールが似合う子だって！」

「それじゃあ志保は？」

園子が志保の代わりに言った。

「くーるびゅーていー？だった気がする」

「私は？」

蘭がたずねると、明矢は腕を組んだ。

「えーつとねえ、確か…」

しばらく唸っていたが、やがて言った。

「アンパンマン！」

「え…？」

蘭が目を点にさせる。

「あ、アンパンマン？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379y/>

私の幸福をあなたに

2011年12月18日21時51分発行